

---

# おいなりさん

天井 天井

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おいなりさん

### 【Nコード】

N0552Y

### 【作者名】

天井 天井

### 【あらすじ】

ノベルなび一次通過作品を命題変えて。

テーマは「京都」「おもてなし」です。

京都での出会いはいつも幻想的である。というのは、僕の敬愛する五十嵐山哲児先生の言葉だ。

五十嵐山先生とは、京都は嵐山に生涯の居を構え、年がら年中京都のことばかり研究している偏執狂な作家で、その界限では名を轟かせている。

五十嵐山先生はその京都好きが高じて、以前、ひたすら京都に対する熱い愛を語ったエッセイが出版している。これが好評を奏したため、今回はその文庫版を出すことが決定した。その際、文庫版特別収録として加筆される部分があるため、編集サイドと企画の打ち合わせを行わなければならない。

そういうわけで、JR嵐山駅を降りてから僕は大きく息を吐いた。五十嵐山先生とは以前の書籍出版以来御無沙汰しているので少し緊張する。しかし、まるで実家に帰省してきたかのような安堵感も同時に覚えた。

五十嵐山先生とは昔、いわゆる御近所さんの関係でたいへんお世話になったことを今でも覚えている。五十嵐山先生からはたくさん京都雑学を教えてもらい、また奥さんからは茶団子などのお菓子をいただいた。三つくらい下の娘さんともよく遊んだものだ。これは僕がまだ年端もいかない小学生で、五十嵐山先生が嵐山に住み始める前の話だ。それから十数年、しばらく疎遠になっただけのもの、僕が今の出版社に勤め始め、五十嵐山先生の担当として顔を合わせた時は互いに驚いた。

改札を出て、漬物屋の酸っぱいような甘いようなよく分からない香りに引き寄せられるかのように通りへ出ると、すぐに渡月橋のほうで小さなだかりが出来ていることに気付いた。黄色い悲鳴が聞こえてくる。おおかたテレビのロケハンか何かで、有名な芸人でも来ているのだろう。少し気になったが、あちらの方向は五十嵐山

先生のお宅とは逆であつたし、わざわざ人の群れに混ざるのもくたびれるので、僕は少しばかりその光景を眺めた後で身を翻し、天龍寺を視界に捉えながら歩を進めようとした。

振り向きざま、「パンツ」誰かと手がぶつかった。同時に少し緩くなつていた鞆の留め具が外れ、中身が盛大にばらまかれた。

「す、すいません！」と反射的に相手に頭を下げ、その勢いで散らばった書類の回収にかかったが、そういえばぶつかった音としてはやけに乾いた音が鳴つたなと思ひ、頭を挙げて見遣ると、それは言わずと知れた京都の名物キャラクター『おたべちゃん』の置き人形だつた。

言い知れぬ恥ずかしさを全身で感じた。書類をぶちまけているために僕は今周りからそれなりに浮いているはずだ。それだけでも充分に失態なのに、あまつさえ人形相手にたいへん誠意のこもった謝罪までしてしまった。周囲から突き刺さる視線とくすくすという笑い声がかたいへん痛い。

僕はしばらく固まつたが、すぐに我に返つて事もなげに書類の回収作業に着手し始めた。酷い汗をかいてしまつてゐる。このまま嵐山を後にして自宅の浴室へ逃げ込みたい気分だ、

刹那、一陣の風が目の前を横切つた。渡月橋方面から吹いてきた、しゅわつと、ラムネのように爽やかな風の音。その風に僕は一瞬退いた。そうして再び姿勢を整えた時、僕はすぐに気付いた。

一つの書類が鳥が如く跡も濁さずに立つていつてしまつてゐることに。

思わぬ事態に目をぱちくりとさせ、風の行方を追うように天龍寺の方向を見据えた。そうして僕が視界に捉えたのは、バサバサと風になびきながら離れていく書類と、それをぞんざいに啜える一匹の子ぎつねだつた。

呆然とした。同時に、さっきの人だかりは奴のせいだつたのだらうな、という考えも浮かんだ。しかしだからどうだという話ではない。問題はあいつが僕の書類を啜えて颯爽と立ち去るうとしてゐる

点だ。そう思い至った直後、僕は駆け出した。駆けたというよりはもはや飛翔に近い一步を踏み出し、奴の後を追った。

観光客のカップルが和気藹藹としているのが横目に窺えた。レンタルを済ませた自転車を押しながら、さてこれからのんびり鴨川にでも行こうかというような雰囲気が見て取れる。無我夢中とはこのことだろう。僕は男の自転車を強奪した。観光客を相手に、およそ府民の風上にも置けないような愚行だと我ながら思う。

しかしこちらとて緊急を要するのだ。謝罪ならば後でしょう。おたべちゃんにしたそれより遙かに深い、反省と自戒に満ちた土下座をしよう。だが今は待つていただきたい。見知らぬ人よ、さらば。

未だなにが起こったのか皆目見当がつかない様子の男にそういった意味を込めて一瞥し、僕は自転車に跨ってペダルを踏んだ。男はやはり訳の分からない風だった。その気持ちは理解に容易い。観光していただけなのにいったいなにがどうして恐ろしい剣幕を呈した男に自転車を強奪されなければならないのだろうか。

気付けば子ぎつねはどんと遠方へ行ってしまっていた。早く追いかけて見失ってしまう。僕は、きつとそんなにスピードを出すとは想定されていないだろうレンタル自転車を余すところなく酷使しながら嵐山を去った。

丸太町通りをひた走り妙心寺の慎ましげな雰囲気を軋むチェーンの騒音でぶち壊した後、妖怪ストリートを百鬼夜行すら思わず退くであろうが如き速度で突っ切り京都御苑脇の狭い歩道も烏丸五条の人混みも全くものともせず通過し、鴨川沿いをちちくりあいながら歩くカップルを軒並み蹴散らしてから七条で左に折れるともう自分がどこにいるのか分からなかったが、それでも複雑な小道を上手い具合にくぐりぬける憎き狐を一心不乱に追跡し続け、小一時間経過したたろうかというところで最終的に奴が逃げ込んだのは奇妙なことに伏見稻荷大社だった。ちなみに僕はこれまでひとしきり乱暴な運転をしてきたが、それまでに人身事故はおるか信号にもほとんど引

つ掛からず、また自転車が大破することもなかったことは奇跡としか言いようのない神秘的なことだ。しかし自転車についてはやはり満身創痍だった。むしろよくここまで形を保ってくれたものだと思う。僕は共に険しい道のりを乗り越えてきたこの自転車に深く敬礼してから、廃棄するかのようにぞんざいに駐輪し、子ぎつねを追った。稲荷大社の景観は見事なものだった。実のところ初めて訪れる場所だったので、その美麗さに僕はいささか感動を覚えた。しかしそうして悦に浸っている暇は無い。またの機会にゆっくり観光するでしょう。もちろん自転車を酷使しての長距離疾走ではなく、電車にゆられてのんびりと、ぼんやりと。

そんなことを考えている内に子ぎつねは人の間を縫うように本殿の脇を進んでいった。奴もまたさっきの長距離を走り抜いたはずなのに、息が切れている様子は見られない。

何体かの狐像の傍らを通り、稲荷山の階段を駆け上がる。一足先に登り切った子ぎつねがすぐ右に折れた。高低差もあって視界から外れてしまった。僕は慌てて後を追う。もしかしたら僕たちはこのまま、いたちごっこならぬきつねごっこになるのではないかと不安になったが、その杞憂はすぐに払拭されることとなった。

角を曲ったところで、僕が捕まえんとしていた狐は、毬のように丸くなり、女性の腕の中に小さく収まっていたのだ。

「???きつね?.....まあ、いいか」

彼女はそう言っ子ぎつねの口から僕の原稿をひよいと引き抜き、やんわり微笑んだ。

僕よりいくらか年下だろうか、どこかあか抜けない顔をしている。その割に服装からは清楚な印象を受けた。お嬢様ルックとまでは言わないが、白を基調としたワンピースと、つばの長い千鳥格子の帽子は、やはりそれに近いものを彷彿とさせる。

彼女は開口一番、僕を見て言った。

「ええと.....千代崎さんは、ここは初めてなんですよね?」

見るも無残な紙へと変貌を遂げているものの辛うじて原型を留めている書類を僕に手渡ししながら彼女は言った。僕は呆然としながらもそれを受け取って。「あ、ありがとうございます」と呟くような小声で言う。

「どうして僕の名前を？」

こちらはしつかりとした口調で訊いた。ただし我ながらどことなく拳動は怪しい。

ところが彼女もまた僕から視線を逸らし、あからさまに動揺した様子で狼狽えた。

「初めてなんですよね？」

今度は語気を強めて。逆切れにも思えるが、ただのごまかしのようにも見える。なんのごまかしなのか。

「はあ、まあ」

小首を傾げつつも頷く。思いついて見てみれば、しわくちやの書類の出だしにはこれ見よがしに、『編集・企画担当 千代崎 隼』とあるじゃないか。もし彼女がこれを見ていたとすれば、名前についてはまだなんとか合点がいく。しかし、「ですよね？」という、質問というにはやけに確認めいた語調がどうにも気になった。

僕が思考を巡らせていると、彼女は一つ大きな息を吐いて気を取り戻した後、こちらに向き直った。

「ここでお会いしたのもなにかの縁。私をここを案内して差し上げます」

彼女は子ぎつねの小さな体躯を器用に片腕に収め、ぶらりと空いた右手をこちらに差し出した。

そうして僕は答えを言う余地もなく、気付けば手を引かれていた。「ちょ……！」

僕は半ば強引に、千本鳥居の入り口に当たる最初の鳥居を見知らぬ女性とくぐることになった。急な展開に調子が全くついてきていないが、別段悪い気もしないのは男の性か。まあ、そうだろう。そう思うにつけ、まだ大いに警戒に値するはずのこの怪しげな女性の

正体も、殊更詮索しなくてもいいような気がしてきた。

一つ一つ鳥居をくぐっている内に、自分がどどん別の世界に誘われていくような、奇妙な感覚に陥っていった。不安だけど、わくわくするような。

久々に感じた好奇心と、どこか謎めいた女性。そしてその女性の手から伝わる、高揚感を帯びた体温。それらを引き連れて僕らは歩いた。延々と続き、しかし絶えず変わる景色に見蕩れながら。

「不思議な場所ですよね」

「そうだね。ファンタジーみたいだ」

「私、ここ好きなんです」

「僕も。初めて来たけど、一目惚れしたよ」

「それは良かったです」

道中、彼女は何度か段差につまずいた（僕も一度だけつまずいた）。その度に彼女は恥ずかしそうに笑った。それがなんとなく、昔見たような気のする表情だったりして、少しどきりとした。

「どうかしましたか？」

彼女はくすつと口を軽く押さえながら言った。彼女の笑顔に、ぼうつと見蕩れていたからか、おそらく僕はそうとうな間抜け面をしていたのだろう。

「なんだか懐かしい気がして。きみとは前にどこかで会ったような気がして」

言いながら、これは酷いナンパ野郎の常套句だと我ながら戦慄した。彼女のほうは再三微笑んで、それだけだった。しかしそれは愛想笑いのような感じではなく、まるで隠しきれない喜びのひとかけらが、思わずほころんで現れたような、見ているこちらが照れてしまうような笑顔だった。

そしてやつぱり、見覚えのある表情だった。

「猫！」

不意に彼女が声を挙げて、急に駆けた。急ぎ足が過ぎたのか、や

はりつまずいて転びかけていた。それでも階段を上って、最終的に腰を下ろした彼女の傍らには、彼女の言うとおり猫がいた。この辺りに住みついているのだろうか。首輪はないが人に慣れているようで、反射的に逃げ出したりはしなかった。

しかしここで、今まで大人しくうずくまっていた子ぎつねが急に暴れ出した。猫が怖いのだろう。自分のホームとも言うべき場所であるのに臆病なものだ。と思うのはやや愚直か。

子ぎつねは強引に彼女の片腕から逃れた。僕は反射的にそれをひっ捕らえようと手を伸ばしたが子ぎつねはいとも容易く回避し、きつねの癖に脱兎の如く駆け抜け草むらに身を消した。そしてその突然の挙動に猫もまた驚いたようで、気付いた時にはもう、狐とは逆の方向へ逃げてしまっていた。

彼女は、「あつ……」と肩を落として残念がったが、大して落ち込んではいないようで、すぐに、「行きましようか」と照れるように笑いながら言って階段を上りはじめた。

「猫、好きなんだ」

「はい。今は独り立ちしてペット禁止の下宿先で寝起きてますが、実家に一匹います。『モズメ』っていうんですけど」

「モズメって、あの物集女？」

彼女はすぐに頷いた。

物集女町といえば僕の実家のある場所だ。ちょっとしたシンパシイのようなものを感じ、そのことをなんの気なしに言ってみると、彼女は、「そうなんですか」と、存外に驚く様子もなく言った。

さてはこじつけっぽく聞こえたか。僕は軽く落胆したが、彼女はそのまま続けた。

「私も昔そこに住んでたんです。お父さんから教えてもらうまで全然読み方分からなかったなあ」

彼女もかつて物集女に住んでいた、という事実には僕は内心驚いた。驚いたけど、彼女が当然の事実を言うような口調で言うものだから、すっかりそれについて言及する機会を逃してしまった。仕方がない

ので、物集女にまつわる話を続けることにし、僕は次のタイミングを虎視眈々と狙う。

「あー……そういえば僕、物集女の読み方、年下の子に教えてもらったな。あれは恥ずかしかった」

はたと彼女は立ち止まった。なにごとかと振り返ると、彼女は両手で口を覆い、前かがみになりながら必死に笑いをこらえているのだった。

いや、そこまでの大笑いを誘うエピソードだったろうか。僕個人としては今やいい思い出だと思っていたのだが、もしや十数年程度の時間経過ではとても風化してくれない規模で恥ずべきことだったのか。そうだとすればこれは大変な事態だ。

僕は困惑しながら、次に彼女の口から発せられるだろう侮蔑の意をふんだんに含んだ同情の言葉を恐れおのきながら待っていたが、彼女の発した言葉は予想とは違う、妙なものだった。

「それは、すいませんでした」  
もはや涙目にすらなっている彼女の笑顔を、再びぼうつと見つめた。

その笑顔は、やっぱりあの日々の面影を確かに残している。

?? ああ、なるほど。

「……そういえば、すっかり訊き忘れてたけども」

僕は芝居がかった口調で尋ねる。

「君の名前は??」

彼女は眼を擦りながら、落ち着くように一旦大きく息を吐いてから、自信を伴った態度で、「楓です」と言った。

「五十嵐山 楓です」

「これは先生のさしがねですか……」

下山途中、僕は五十嵐山先生に電話を入れ、その回線が繋がると同時に気の抜けた口調で言った。それを聞いた五十嵐山先生は電話越しにひとしきり大笑した後、「驚いたろう?」と実に憎たらしい

口調で言った。

「ええ、ほんとうに」

「いやしかしだな。演出を買って出たのは確かに私であるが、何を隠そう企画したのは楓自信だよ」

僕はぎよつとして、傍らで満足気に鼻歌を歌っている楓ちゃんを横目で見た。

「この前きみと久々の再会をしたことを楓に話したら、自分も会いたいと言いだしてね」

「だからって、こんなまどろっこしいことしなくても……」

「『京都での出会いはいつも幻想的である』」

「はあ……?」

「くははっ」

やはり変な人だ。

「それにしても、うちのモズメもよくやってくれたよ。やはり賢い猫だ」

「モズメ、ですか?」

「ああ。きみの持ち物?? まあ企画書かなにかだろうが、そいつを盗んだ猫がいたろう。私がこの日のために全力で教え込んだ芸当だ」

さては暇人かこの人は。刹那的にそう思ったものの、僕の疑問に思う点は他のところにあった。

「僕の書類を盗んだの、きつねでしたよ?」

これには五十嵐山先生も驚いたようだった。

「そんなはずなからう」

「いやでも、実際そうでしたし……」

「ふむ」

五十嵐山先生はしばらく考えるように黙り込んだが、やがて出た言葉は、「まあ、いいんじゃないかなからうか」と適当なものだった。

「私が思い描いたものよりも、ずっと幻想的じゃないか」

そうして五十嵐山先生は一人勝手に納得した。僕としては置いてけぼりを喰らわされた気分だ。

「とにかく、今日の打ち合わせはまた後日でいいから、今日はしばらく楓を頼むよ」

「え?」

僕はその反応に被さるように、ツー。ツー。という電子音が通話口から聞こえた。

勝手に過ぎる。

「終わりましたか」

僕が携帯をポケットに入れると、すぐに楓ちゃんが言った。

「なんとというか……あの人は相変わらず好事家で、自由で……」

「まあ父はそれが取り柄ですから」

「きみも確実にその血筋を受け継いでるけどね」

彼女は、「まあまあ」と苦笑した。いたずらがばれた子どもみたいに無邪気な笑顔は、本当に変わらない。

「ところで千代崎さん、これからお時間あります?」

「先生から、きみの面倒を見るように言われたよ」

僕がそう言うと彼女は小さく、「やった!」と、呟いて、目を輝かせながら僕の手を両手で強く握んだ。

「では、喫茶店にでも行きましょう。きつねうどんの美味しい小洒落たお店を知っています」

「きつねうどんの美味しい小洒落た喫茶店って風変わり過ぎないか

……?」

「行きましょう!」

楓ちゃんは握った僕の手をそのまま引いて、稲荷山をずんずんと下っていった。案の定つまずいたので心配になり、代わって僕が楓ちゃんの手を引いていった。この時の楓ちゃんはいへん楽しそうで、僕もなんだか懐かしい気分になり、二人して笑った。

入り口まで戻ってくると、くだんの子ぎつねが鳥居の陰に隠れてこちらを覗いていた。小麦色の尻尾をすすきのようになびかせている。

確かに、おっさんに仕組まれた出会いよりは、きつねが起こす出

会いのほうが、幻想的には違くない。そう思う。

僕は子ぎつねが悠長たる足取りで去っていくのを見送ってから、  
稲荷大社を後にした。

(後書き)

私的に反省点の多々ある小説でしたが、お楽しみいただけたなら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0552y/>

---

おいなりさん

2011年10月30日21時18分発行